

【旧約聖書日課】イザヤ書 2章1～5節

- 1アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて幻に見たこと。
- 2 終わりの日に
主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち
どの峰よりも高くそびえる。
国々はこぞって大河のようにそこに向かい
- 3 多くの民が来て言う。
「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。
主はわたしたちに道を示される。
わたしたちはその道を歩もう」と。
主の教えはシオンから
御言葉はエルサレムから出る。
- 4 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。
彼らは剣を打ち直して鋤とし
槍を打ち直して鎌とする。
国は国に向かって剣を上げず
もはや戦うことを学ばない。
- 5 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 13章8～14節

- 8互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。9「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。10愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。
- 11更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に來ています。今や、わたしたちが信仰に入ったところよりも、救いは近づいているからです。12夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。13日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、14主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

【福音書日課】 マタイによる福音書 24章36～44節

36「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。ただ、父だけがご存じである。37人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。38洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。39そして、洪水が襲って来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。40そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。41二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。42だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。43このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入れさせはしないだろう。44だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

《クリスマスの朝》を迎えるために【こども説教のために】

アドヴェントのロウソクが一つ灯りました。今日から、教会はクリスマスを迎える備えを始めます。すでに、子どもたちとはアドヴェントを始めるための準備をしてきましたが、それもすべて、今日から始める備え、クリスマスを迎える備えを始められるようにするためにしてきたことです。

アドヴェントのロウソクを四つ灯すまで、わたしたちは、クリスマスを迎える備えをいたします。特に今年は、例年のように大勢が集まって祝うことは難しそうですから、どのような祝い方、集まり方にすればよいか、新しく考えることも必要です。それは大変なことかもしれませんが、驚くような新しいクリスマスを迎える機会になることかもしれません。

子ども時代、クリスマスを迎える備えと言えば、クリスマスの朝、枕元に置かれるはずのプレゼントに欲しいものを、おもちゃのカタログを取り合いしながら想像することでした。クリスマスの朝、欲しかったものを枕元に見つけることは、一度もありませんでしたが、それでも想像を膨らませることは楽しいことでした。

クリスマスの朝、枕元にプレゼントを見つけてことができなくなったのは、いつからだっただけでしょうか。前夜遅くまで教会の祝いの礼拝に出て深夜に帰り、朝起きられなくなった頃からだったかもしれません。もっとも、その頃には、クリスマスの朝のプレゼントを期待して、何日も前から想像を膨らませながら待つということをしなくなっていましたから、何もないのは当然だったのでしょうか。

わたしたちは、今年のクリスマスの朝を、どんな期待を持って、想像を膨らませながら、迎えることができるのでしょうか。

不意の来客

長く空き地だった隣地で一年前から、新しい事業を始める業者さんの店舗建築が続いていましたが、昨日からようやく開業されたようです。どのような方が来客されるのかわかりませんが、中には隣に教会があることに気づかれる方もあるでしょう。今までは来られなかったような方が、教会の扉を開けて訪ねて来ることもあるかもしれません。

教会堂は、できる限り昼間は開錠して、いつどなたが訪ねて来られても良いように備えていたいと考えていますが、わたしども牧師家族だけでは、24時間365日対応するということはできていません。時には用事で外出しなければいけないときに、留守を頼めず、仕方なく入口の鍵をかけて出かけることもあります。不思議なことに、そのようなときに限って訪ねて来られる方がいるようです。

もちろん、教会に来られる方が皆、牧師を訪ねて来られるわけではないでしょう。教会員の皆さんであれば、ただ自分の用事があるって来られることもあるでしょうし、そうでなくても、ただ礼拝堂でひと時祈りたいと、お出でになる方もいるのです。ただ、入口の扉を押し開けるのは、きっと勇気のいることなのだと思います。勇気をもって扉を開けて入ってみれば、物音に気付いた牧師が顔を出したりしますから、とても気安く入って来られる会堂ではありません。本当は、入口の扉をいつも開け広げておけば、気安く中に入っただけのし、黙って礼拝堂でお祈りしていただくこともできるのです。

「教会はどなたのことも歓迎します」と謳っていても、実際の不意の来客にどれだけ応じられているだろうかと思います。実際は、信者の皆さんのお訪ねさえ、十分に対応しきれていないのですから、お迎えすべきだった多くの方のことを蔑ろにしてきてしまったのではないかと、わたしは思っています。大勢を集める行事の実施が憚られる社会情勢の中で、なおさら、そのことに思いを致さないではいられないのです。

主イエスのもとには、確かに大勢に人が集まりました。五千人からの人びとを前に教えを語られたこともありました。けれども、その主イエスが繰り返し、「これらの小さな者を一人でも軽んじないように」（マタイ 18:10）とおっしゃられたのです。もちろん、主イエスご自身が、そのように実践なさったのでしょうか。そうであればこそ、終末の最後の審判に触れて教えられた主イエスは、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ 25:40）ともおっしゃられたのです。

主イエスは、今日の福音書日課（マタイ 24章）で、「その日、その時は、だれも知らない」とおっしゃられます。「人の子が来る日、その時は、だれも知らない」というのです。「わかっていれば、準備しておける」でしょう。いいえ、「わからないから、準備しておくように」とおっしゃられるのです。

扉を開けて…

日曜日の朝、教会に皆さんがいらっしゃることは、わかっています。皆さんをお迎えするために、わたしどもはもちろん、幾人もの奉仕者が、土曜日から準備をしてくださっています。日曜日の朝、会堂の入口を開け放ち、受付を整えておくのは、皆さんが必ずいらっしゃってくださるとわかっているからです。準備していても誰も来ないかもしれない、となれば、準備の手は徐々に疎かになってくるでしょう。

わたしは、初任地で信者 20 人ほどの小さな教会に仕えていたとき、平日夜の集会にどなたもいらっしゃらない時期が続いたことがありました。必ずお出でになるという方があって続けていたのですが、その方が来られなくなったのです。それでも、その時間になれば会堂の一室を整え、聖書の学びと祈りのための準備をして待ちました。何週間も一人で時間の過ぎるのを待つことが重なると、わたしの準備も疎かになり始めました。ところが、そのようなときを見計らったように、今までお出でになられていなかった方が突然、おいでになられる、というようなことがありました。慌てて、不十分な準備を隠すように必死で、聖書の黙想を語り、祈りを導く、ということになった経験は、一度や二度ではありませんでした。卑近な話ですが、不意の来訪者に備えているべきことを教えられる小さな経験でした。

それがわたしたちの姿なのでしょう。そのようにして、わたしたちは、主イエスがお教えくださったこと、「この最も小さい者の一人を軽んじないように」という教えから、離れてしまう一歩を踏み出しているのでしょう。

そうであればこそ、わたしたちは、今再び、アドヴェントを始めるのです。おいでになる御子を、わたしたちの扉の中にお迎えする備えを、始め直すのです。いつの間にかそっと閉めてしまっていたわたしたちの扉を、もう一度開けるのです。掛けてしまっていた鍵を、外すのです。

御子として、幼子としておいでの方は、いつおいでになられるのか、わかりません。その日、その時は、だれも知らないのです。けれども、使徒は教えました。「あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。…夜は更け、日は近づいた」のです。

御子のご降誕、どことも知れぬ飼い葉桶に寝かせられる幼子のお生まれに備えるときです。そのお方は、確かにお生まれになられたのです。そのお方は、今も、わたしたちの間に幼子として、最も小さな者として、おいでになられるでしょう。わたしたちが、大きく開いた扉の中にあのクリスマスの朝の日を迎え入れて、主の光に照らされた者、神の子として生きるようになるためです。

そう、わたしたちは、最も小さな者を決して軽んじない神の子らとして、この世界を神の国、神の家とする働きに、あらためて招かれています。